



日本画家・福田眉仙の初期から晩年まで、約80作品を紹介 企画展「日本画家 福田眉仙展」開催

2020年10月10日（土）～ 11月15日（日）

姫路市立美術館 企画展示室（兵庫県姫路市本町68-25）

姫路市立美術館は、明治から昭和にかけて活躍した日本画家・福田眉仙の作品約80点を一堂に展示する企画展「日本画家 福田眉仙展」を、10月10日（土）～ 11月15日（日）の期間、開催いたします。1940年に開催予定だった幻の東京五輪に向けて制作され、戦災により焼失したと考えられていた《富士五湖》の最初の作品と、1947（昭和22）年に再制作した作品の両方が一度に展示されるのは初めてとなります。

《富士五湖》の最初の作品と再制作作品の両方を同時展示します！

【最初の作品】



【再制作作品】



- 上) 《富士五湖》（右隻） 絹本着色（六曲一双屏風） 1936（昭和11）年 姫路市立美術館蔵
下) 《富士五湖図》（右隻） 絹本着色（六曲一双屏風） 1947（昭和22）年 姫路市立美術館蔵

《報道関係者お問い合わせ先》

姫路市立美術館 広報事務局（TMオフィス内）担当：馬場・清水・小林

TEL：06-6231-4426 FAX：06-6231-4440 E-mail：himeji@tm-office.co.jp



展覧会概要

福田眉仙は現在の相生市に生まれた日本画家です。久保田米僊、橋本雅邦に入門。日本美術院にも参加しました。1909（明治42）年、岡倉天心の勧めで中国に渡って各地を写生し、その成果は『支那三十図巻』という大作の絵巻に仕立て上げられます。また1940（昭和15）年に開催が予定されていた東京オリンピックにあわせ、国立公園十二景を描いた連作屏風を制作し、海外からの訪問者に日本を紹介する展覧会の開催を企画するなど、旺盛に活動していました。しかし横山大観との意見の相違などから、中央画壇からは遠ざかっていきました。また、戦災により多くの作品が焼失あるいは散逸し、作家としての全体像も見えにくくなっています。

岡倉天心が「南画に向いている」と評した眉仙ですが、その本質は米僊や雅邦から受け継いだ「写生」であり、作品の制作にあたっては対象を実際に見てスケッチしてから臨んでいたことがうかがえます。

本展では、当館で所蔵する国立公園十二景のひとつ『富士五湖』や『支那三十図巻』など眉仙の代表作を中心に、眉仙の作品を一堂に展示いたします。

開催概要

タイトル：日本画家 福田眉仙展

会 期：2020年10月10日（土）～ 2020年11月15日（日）

休 館 日：月曜日

※10月27日（火）、10月28日（水）は展示替えのため休室
（常設展示室は開室しています）

開館時間：10：00～17：00（入館は16：30まで）

会 場：姫路市立美術館 企画展示室（〒670-0012 兵庫県姫路市本町68-25）

観 覧 料：一般800（600）円、大高生600（400）円、中小生200（100）円

※（ ）内は20名以上の団体料金

問い合わせ：姫路市立美術館 079-222-2288

主 催：姫路市立美術館

後 援：朝日新聞姫路支局、神戸新聞社、産経新聞社、サンテレビジョン、播磨時報社、
播磨リビング新聞社、姫路ケーブルテレビ、姫路シティFM21、毎日新聞姫路支局、
読売新聞姫路支局、ラジオ関西

会期中の催し

【解説会】

学芸員が展覧会の見どころを解説いたします。

日時：10月24日（土）14時～（約1時間）

※13：30までに直接会場にお越しください。

定員：20名（先着）

会場：美術館 2 階講堂

料金：無料（ただし、本展覧会の入場券（半券可）が必要。）

* 情勢により中止の場合がございます。



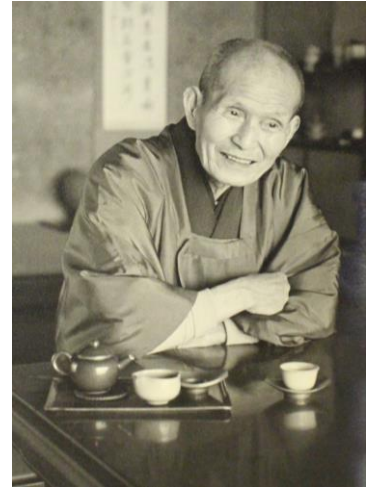
福田眉仙プロフィール

福田眉仙

1875（明治8）～1963（昭和38）

FUKUDA Bisen

赤穂郡矢野村（現相生市）に生まれる。本名周太郎。久保田米僊、橋本雅邦に学び、24,5歳の頃から絵画共進会、内国勸業博覧会等に出品し、度々受賞する。岡倉天心の勧めにより、1909（明治42）年中国に渡る。足掛け3年の滞在中、実際に目にした中国の風景を、数多くのスケッチに残す。帰国後、中国に題材をとった作品を次々と制作。特に山水風景をよくし、京都大覚寺、神護寺などの天井絵、襖絵なども描いた。



見どころ

①初期から晩年まで、約80作品を展示

本展では、姫路市立美術館で所蔵する国立公園十二景のひとつ《富士五湖》や《支那三十図巻》など眉仙の代表作を中心に、初期から晩年までの約80作品を展示します。

②大作《支那三十図巻》のすべての巻を前後期に分けて展示

眉仙が中国滞在中に書き溜めたスケッチをもとに制作した、全巻で約250mを超える大作《支那三十図巻》のすべての巻を、前後期に分けて展示します。

※前期：10月10日（土）～10月25日（日）

後期：10月29日（木）～11月15日（日）

③眉仙が二度制作した“富士五湖”を展示

眉仙は1940（昭和15）年に開催予定だった東京五輪に合わせ、《富士五湖》などの国立公園十二景を描いた屏風を制作していました。その後、東京五輪は中止となり、この作品も戦災で焼失したと考えられ、眉仙自身も1947（昭和22）年に《富士五湖図》として再制作していました。今回は、再制作された《富士五湖図》はもとより、戦災で焼失したと考えられていた1936（昭和11）年制作の《富士五湖》も合わせて展示します。



展覧会構成

第1章 修業時代

眉仙は相生市矢野町瓜生に生まれました。少年時代に菩提寺である光専寺に投宿していた宮田其溪に絵の手ほどきを受け、光専寺の襖に蓮の絵を描いています。その後上京して久保田米僊、橋本雅邦に師事します。当時は雲岳や麥僊という画号を用いていました。この時代の作品には歴史画や仏画などが多く見られます。そこには若き日に学んだ久保田米僊や、橋本雅邦の影響が見られます。これらの作品は、従来の眉仙展ではあまり紹介されてこなかったもので、眉仙の絵画形成を考える上で貴重なものだと思います。

作品解説



《源三位頼政像》 絹本着色 1895～97（明治28～30）年 個人蔵

画中に後の書き込み「明治時代絵画展覧会出品中記念乃作 雲岳八出京当時ノ号也」とあるが、何の展覧会に出品したかは不明である。また、久保田米僊の影響が感じられることから、上京後の作品と思われる。このことから上京後も「雲岳」の画号を使用していた時期があったと思われる。源頼政は平安時代の武将で、鶴退治で有名だが、和歌にも秀でていた。上部にある四角の囲みは、和歌賛を予定していたものとみられる。



展覧会構成

第2章 大陸を描く 中国・韓国の風景

眉仙の作品のうち、もっとも多いのが中国の風景を主題とした山水画です。若いころからスケッチをすることが好きで、日本各地を回って風景をスケッチしていましたが、岡倉天心から東洋画の神髄を知るために中国に渡ることを勧められます。1909（明治42）年から足掛け3年眉仙は中国に渡り、風景をスケッチしました。その後従軍の名目で中国にもう一度、朝鮮半島にも一度旅行に行っています。この後眉仙は、実際の景色をもとに山水画を描いています。大陸の風景は、眉仙の作品の中でもっとも評価の高い部分です。

作品解説



くりゅうこたんのず

《九龍古潭之図》 紙本墨画淡彩 制作年不詳 姫路市立美術館蔵

現在の北朝鮮金剛山の外金剛にある九龍滝・九龍淵を描いたものと思われる。この地は仏教の聖地で多くの石仏、石塔などがあったが、朝鮮戦争で多くが失われた。かつては遊覧に来た人たちが岩に名前を刻む風習があり、名前を彫ることを生業とする刻字工と呼ばれる職業もあった。作中の刻字工は剃髪しているので、僧侶であろう。「陰森三十六天開 一壑雷聲百魁摧」という詩の一節が書かれているが、これは趙榮順（1725～1775）の「九龍淵」という詩で、おそらく現地の石に刻まれた詩と思われる。



作品解説



こうりゅうなだのす

《興隆灘図》 絹本着色 制作年不詳 西宮市大谷記念美術館

制作年は不詳ながら、1932（昭和7）年の画集に掲載されていることから、その少し前に描かれたと推測される。興隆灘は《支那三十図巻》の「巴水図巻上巻」にも描かれている長江（揚子江）を船で航行する際の難所である。右隻には、陸上から船を曳く様子が描かれている。



さつきょうきかん

《竿橋奇観》 絹本着色 1960(昭和35) 年 個人蔵

安瀾橋を描いたもの。成都北方に都江堰という灌漑施設がある。これは岷江の増水対策として古代に作られたもので、川の流れを分けて運河へと引き込むことで洪水を防ぐ施設である。安瀾橋はこの施設の一部で、宋代に作られた竹と木でできた吊り橋である。明代に焼失したが清代に再建された。

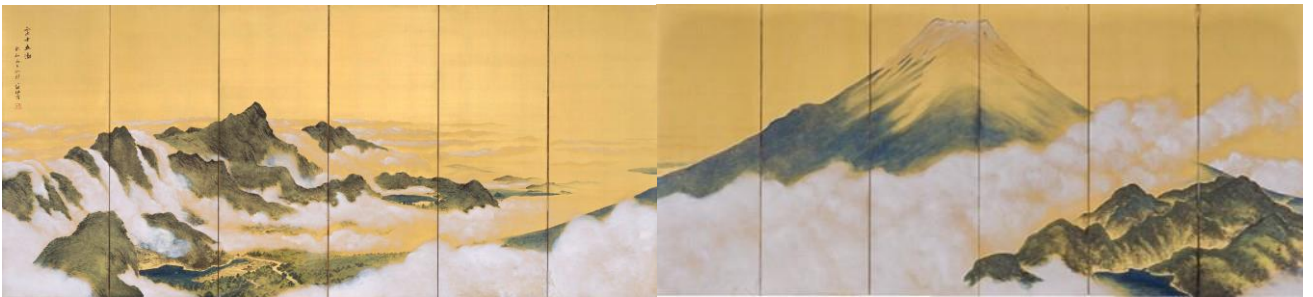


展覧会構成

第3章 国立公園と日本の風景

眉仙は国内でも各地へのスケッチ旅行に赴いています。昭和15年（1940）東京オリンピックの開催が予定されていましたが、眉仙は当時の国立公園を12双の屏風に描き、日本を訪れた外国人に紹介する展覧会を開催することを計画しました。戦争によりオリンピックは中止となり、作品も多くが失われたと考えられていました。しかし近年《富士五湖》が現存することがわかり、当館の所蔵品となりました。日本の風景においても、写生に基づいて作品を描いており、山水の中に自動車など近代的なものが描かれていることがあります。

作品解説



《富士五湖》 絹本着色（六曲一双屏風） 1936（昭和11）年 姫路市立美術館蔵

1940（昭和15）年に予定されていた東京オリンピックを期して制作された、国立公園シリーズの一環として描かれた作品。富士五湖とは西湖、精進湖、河口湖、山中湖、本栖湖の5つの湖を言う。《支那三十図巻》同様、この作品も戦災で失われたと思われ、1947（昭和22）年に《富士五湖図》として再制作された。再制作作品とは構図、大きさ共に同じであるが、細部の描き方や色使いは異なる。



展覧会構成

第4章 支那三十図巻と中国スケッチ

眉仙の第一回目の中国旅行の成果は《支那三十図巻》と、第二回目の中国旅行の成果である《中国スケッチ》をあわせて紹介します。本来この2つは第2章に含まれるものですが、数が多いため別に章を設けました。《支那三十図巻》は全巻で約250mにも及ぶ長大なものです。長い間戦災で焼失したと思われ、眉仙自身もそれを信じて《中国三十絵巻》という再制作作品を描いています。また《中国スケッチ》は従軍という名目で中国を旅行したときのスケッチですが、あまり戦争の跡を感じさせない明るくのびのびとした風景です。写実を基本とした眉仙の真価を発揮した作品といえるでしょう。

作品解説



《長城図巻》（部分） 紙本墨画淡彩 1919（大正8）年 姫路市立美術館蔵

北方の外敵に備えるために築かれた城壁、万里の長城を描いたもの。最初は春秋戦国時代に造られ始め、現存のものはほとんどが明の時代のものである。東端は遼寧省虎山、西端は甘粛省嘉峪関。眉仙は北京にある明代皇帝の陵墓「明十三陵」の見えるあたりから描き始め、万里の長城の名所として最も有名な八達嶺あたりまでを描いている。居庸関あたりから山深くなり、雪景となっている。

《報道関係者お問い合わせ先》

姫路市立美術館 広報事務局（TMオフィス内）担当：馬場・清水・小林

TEL：06-6231-4426 FAX：06-6231-4440 E-mail：himeji@tm-office.co.jp